

15 前置詞の随伴と残留

● 前置詞の随伴と残留

前置詞の**随伴** (pied-piping) とは、(1) のように、前置詞の目的語 (what) が移動する際に、前置詞 (about) が一緒に移動することである。これに対して、前置詞の**残留** (stranding) とは、(2) のように、前置詞の目的語 (what) のみが移動し、前置詞 (about) が元の位置に留まることである。

- (1) About what are you talking __? (随伴)
- (2) What are you talking about __? (残留)

本稿では、前置詞随伴と前置詞残留の（不）可能性をめぐるいくつかの問い合わせを紹介した後、これらに対する代表的な分析をみる。

● 前置詞随伴と前置詞残留の（不）可能性をめぐる問い合わせ

前置詞随伴は多くの言語で可能であるが、前置詞残留は限られた言語でのみ観察される。例えば、随伴と残留の両方が可能な英語と異なり、フランス語やロシア語では、前置詞が残留されることなく常に随伴される。

また、英語と異なり、デンマーク語やアイスランド語では、(2) のようなwh句の移動における前置詞の残留は許すが、(3) のような前置詞の目的語を受動文の主語位置へ動かす移動では前置詞の残留を許さない。

- (3) This carpet was stepped on __. (Law 2006: 631)
さらに、随伴と残留の両方の選択肢を持つ英語のような言語においても、(4) に示すように、前置詞の残留が不可能な場合がある。

(4) *The carpet was stepped repeatedly on __. (ibid.: 639)
これらの事実から、いくつかの問い合わせが生じる。(i) 英語のような前置詞残留を許す言語とフランス語のような前置詞残留を許さない言語を分ける要因は何か、(ii) デンマーク語のような言語で、wh移動と異なり、受動文を形成する移動では前置詞残留ができないのはなぜか、(iii) 英語のような前置詞の随伴と残留の両方の選択肢を持つ言語において、それらの使い分けを決定する要因は何か。これらは、前置詞随伴と前置詞残留を扱う研究の中心的な問い合わせを成してきた。

● 前置詞の随伴と残留に対する代表的な分析

Law (1998, 2006) は、前置詞残留を許す言語とそうでない言語の違いを、冠詞要素を前置詞に融合させる**編入** (incorporation) の有無に還元する。例えば、(5a)

のフランス語の前置詞随伴の例では、編入の結果、前置詞 de ‘about’ が後続する冠詞要素とされる quel ‘which’ と融合し、補充形 (suppletive form) と呼ばれる 1 語の形 (Duquel) をとる。wh 要素を移動する際、前置詞は、wh 要素と 1 語を成すため分断できず、随伴されなければならない。前置詞残留ができない言語では編入が義務的に行われ、(5b) のように、編入を行わずに前置詞 de を残留させることができない。一方で、英語のような前置詞残留を許す言語では、前置詞への編入が行われず、前置詞残留が可能となる。

- (5) a. Duquel sujet as-tu parlé__?

About-which subject have-you talked

‘About which subject did you talk?’

- b. *Quel sujet as-tu parlé de__?

which subject have-you talked about

‘Which subject did you talk about?’

(Law 2006: 649)

英語のような前置詞残留が可能な言語における前置詞の随伴と残留の使い分けに対する代表的な分析としては**再分析 (reanalysis)** (Hornstein and Weinberg 1981) が挙げられる。これは、前置詞と隣接する動詞をあたかも一つの動詞のように組み替える仕組みである。この分析によると、たとえば (3) の前置詞残留は、前置詞 on と動詞 stepped が一塊の動詞として再分析された結果、this carpet の移動の際に on を随伴して stepped と分離することができなくなり、前置詞 on が残留する。また、随意的な操作である再分析が行われない場合、前置詞が随伴される。この分析は、(3) と異なり、(4) で前置詞残留ができないことを説明できる。(4) では、動詞と前置詞の間に repeatedly が介在し、前置詞と動詞の隣接性が求められる再分析が妨げられるため、前置詞は動詞の一部として残留することができないと考えられる。

また、編入や再分析といった構造に基づく説明には限界があり、前置詞の随伴と残留の使い分けは、言語処理上のコストに基づき決まるとする分析 (Gries 2002) や、文脈情報により決まるとする分析 (Takami 1992) もある。

●まとめ

前置詞随伴と異なり、前置詞残留は限られた言語環境でのみ許される。随伴と残留の使い分けに対する原理だった説明が求められる。

(木村 博子)